Japan society of Home Economics

日本家政学会誌 Vol. 42 No. 6 529～536 (1991)

高齢者の食事満足度に及ぼす要因（第2報）

足 立 蓉 子

（山口女子大学家政学部）

平成2年6月20日受理

Analysis of Degree of Satisfaction in Dietary Life among Aged People (Part 2)

Yōko ADACHI

Faculty of Home Economics, Yamaguchi Women's University, Yamaguchi 753

Analysis of degree of satisfaction in dietary life among aged people was performed in 5 areas of urban area, fishery area and rural area. A survey was conducted among 434 male and female inhabitants aged more than 65 to assess the degree of satisfaction about meals and factors affecting it. The survey was conducted by personal interviews using questionnaire sheets and the data obtained were analyzed with Hayashi's quantification I method. The results are summarized below:

(1) The degree of satisfaction was high among aged people. Especially the item that meals were delicious and the item of favorite foods were outstanding.

(2) Factors yielding a positive score in the dietary satisfaction were firstly the intake of meals, secondly the area, and thirdly taking meals regularly.

(3) The degree of satisfaction in meals was affected not only by the dietary life but also all the life including health and so on.

(Received June 20, 1990)

Keywords: aged people 高齢者, dietary satisfaction 食事満足度, dietary life 食生活, Hayashi's quantification I 林の数量化I類.

1. 緒 言

わが国は，かつて経験したことのない急激な人口の高齢化という変化に直面しようとしている．それにともなって，人々の生活にさまざまな問題が生じてきている．なかでも食生活は，高齢者にとって重要な位置をしめる問題と考えられる．そこで，前報[1]にひきつづき高齢者の食事のありかたについて調査研究を行った．

著者は，食べる人の食に対する満足度という視点から，高齢者の食事満足度について研究を行ってきた．前報[1]では，世帯構成別の違い，および食事満足度に影響を及ぼす要因としては，高齢者の生活全般がかかわることを報告した．本報では食事満足度の要因について，ある程度の普遍化を図るための一つの方法として，地域類型を立てて検討を試みた．地域類型としては都市型，漁村型および農村型の類型から，対象として5地域を選定し比較検討を行った結果を報告する．

2. 方 法

(1) 対象地域の概要

対象地域は都市型，漁村型および農村型の類型から5地域を選定した．

都市型の一つ山口県下関市後田町と山の口町（以下後田とする）は，下関市の中心地に近い町である．早くから西日本における政治経済の交流点，外来文化の流入地として栄えてきた，下関市の中心地に近い古い町であり，緑も多く高校や短期大学等が集中しており，交通の便がよい都市型の地域である．後田町の人口は4,164人，山の口町が496人である．このうち65歳以上は後田町が708人（男277人，女431人），山の口町が96人（男40人，女56人）である．

他の一つ福岡県粕屋郡宇美町炭焼（以下宇美とする）は，福岡市に隣接した粕屋郡の南端に位置する．かつては石炭産業の町として発展した．しかし最近は，福岡市

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

のベッドタウンとして成長している．今後も大型団地の開発などにより，さらに多くの人口増加が見込まれている．自然環境を保持してきた近郊都市地域である．人口は，10,802人，うち65歳以上が1,091人（男407人，女684人）である．

漁村型の長崎県南松浦郡有川町（以下有川とする）は五島列島の東北部に位置する．古くは捕鯨を中心とした漁業が盛んであったが，現在は水産業を主とした漁業地域である．若年就業者の島外流出による過疎化，人口の高齢化などの問題を抱えている．有川港-佐世保港をむすぶフェリーと，上五島空港-長崎・福岡空港をむすぶ航空機が地域住民の本土との重要な交通手段となっている．人口は，9,292人，うち65歳以上が1,220人（男性446人，女性774人）である．

農村型の一つ鳥取県東伯郡東伯町八橋（以下八橋とする）は，東伯町の北西部に位置する．西は赤碕町と接し，養鶏や酪農，二十世紀梨の生産が盛んな農村地域である．人口は，4,623人，うち65歳以上が743人（男286人，女457人）である．

他の一つ山口県都濃郡鹿野町（以下鹿野とする）は，山口県の東北部に位置する．周囲を中国山地の山々に囲まれ，米作りを中心とした山間農業と，県下有数の山林地帯である．高齢者率19.4％にまで達し，急速な高齢化社会に対応して，敬老年金などの各種年金の支給や，年寄りの生きがい対策のための高齢者教室の開講，老人憩の家や高齢者生活活動センターの設置など，豊かな心を養う老人福祉をすすめている山間型農村である．人口は5,426人，うち65歳以上が1,051人（男452人，女599人）である．

次に対象5地域の高齢者率の推移を表1に示した．全国平均よりも下回っているのは宇美の10.1％であり，その他の4地域は全国平均よりも速いテンポで高齢化が進んでいる地域である．宇美は福岡近郊の新興住宅地として注目されており，若い世代人口の割合が高いためではないかと考えられる．

表1．対象地域の高齢者率（％）

	後田	宇美	有川	八橋	鹿野
1975（昭和50年）	8.2	8.4	8.5	12.4	14.1
1980（昭和55年）	9.7	9.0	9.6	13.6	15.9
1985（昭和60年）	11.4	9.8	11.3	15.1	17.4
1987（昭和62年）	12.3	10.0	12.3	16.6	19.0
1988（昭和63年）	12.8	10.1	13.1	16.7	19.4

(2) 対象者の抽出

1988年3月1日現在の対象5地域の住民一覧表をもとに65歳以上の男女651人を無作為抽出した．

(3) 調査期間

1988年7月から9月．

(4) 調査方法

調査方法は質問紙による個人面接法を用いた．面接にあたっては調査員が調査票の設問を読んで質問し，相手の回答を聞き取って記入する方法を用いた．調査はあらかじめ面接調査の訓練を行ったゼミナールの学生によって行った．

(5) 回収状況

有効回収数434，回収率67％である．

(6) 調査内容

調査内容は前報[1]とほぼ同様である．満足度に関する調査項目は，前報[1]の結果から検討して1項目を加え6項目とした．すなわち，① 食事はおいしいですか（味覚的要因），② 食事は楽しいですか（精神的要因），③ 食べたいものを食べていますか（物質的要因―質），④ 食事は待ち遠しいですか（身体的要因），⑤ 食卓の雰囲気は明るいですか（環境的要因）の5項目に，⑥ 食べたいだけ食べていますか（物質的要因―量）の1項目を加えた．満足度の程度は，上記の6質問項目に対する「はい」の回答に2点，「いいえ」の回答に1点を与え，その合計点を算出してそれぞれの人の食事満足度点数とした．

満足度に影響を及ぼす要因の調査項目は，前報[1]に準拠して整理し，食生活にかかわる直接的要因24項目，食生活にかかわる間接的要因49項目を設定した．

(7) 分析方法

全調査項目について単純集計，および必要に応じクロス集計を行った．つぎに，食事満足度とそれに影響すると考えられる項目とのクロス集計結果についての χ^2 検定にもとづき，主要な要因を精選したのち，満足度を外的基準として数量化Ⅰ類[2]による分析を行った．

3. 結果と考察

(1) 結果の概観

対象者の属性を地域別にみると，性別割合では，有川が男性33％，女性67％であり，男女の割合の差が大きい．これに対して宇美は男性44％，女性56％であり，男女の割合の差が小さい．後田，八橋，鹿野は女性がそれぞれ60，57，57％であって，1985年国勢調査による

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表 2. 世帯構成の地域別内訳

世帯構成	後田	宇美	有川	八橋	鹿野	合計
独居世帯	11 (14)・	6 (7)	16 (20)	10 (12)	8 (7)	51 (12)
一世代世帯	40 (51)	24 (30)	31 (38)	18 (21)	42 (38)	155 (36)
二世代世帯	16 (21)	15 (19)	18 (22)	24 (29)	23 (21)	96 (22)
三世代世帯	11 (14)	35 (44)	16 (20)	32 (38)	38 (34)	132 (30)
合計	78 (100)	80 (100)	81 (100)	84 (100)	111 (100)	434 (100)

実数は世帯数，・（ ）内の数値は％

全国平均の男性49％，女性51％に比べて5地域ともに女性の割合が高い．

年齢の構成は地域間に著しい差はみられず65～74歳が57～67％，75～84歳が27～39％，85歳以上は1～9％である．1988年全国平均[3]は65～74歳が60％，75～84歳が33％，85歳以上が7％であり類似の傾向にあるといえる．

配偶者の有無では5地域ともに「配偶者あり」が「なし」に比べて多く，総計では配偶者ありが62％，配偶者なしが38％である．

世帯構成は，表2に示すように独居世帯では有川が20％，一世代世帯では後田が51％と，それぞれ他の4地域に比べて高い．65歳以上の1988年全国平均[4]は独居世帯14％，一世代世帯20％，三世代世帯42％である．

子供の数では後田は0～2人，宇美，八橋，鹿野は3～4人，有川は5人以上がそれぞれほぼ半数を占めている．

孫の数について5地域を比較すると0人，1～6人，7人以上に分けた場合，後田，宇美，八橋，鹿野は1～6人がそれぞれ68，58，55，48％と最も多く，ついで7人以上である．これに比べて有川では7人以上が57％で最も多く1～6人は33％である．

学歴では有川が小卒以下と中卒を合わせて88％で，その他の地域と比べてこの割合が高く，大卒以上は0％である．逆に後田では小卒以下と中卒を合わせて47％であり，大卒以上は13％で5地域のなかで大卒以上が最も多い．その他の地域は全国統計[5]に近い値である．全国における65歳以上の学歴は小卒以下と中卒を合わせて77％，高卒17％，大卒以上5％である．

過去の職業では「勤め」が宇美66％，後田56％，有川40％，鹿野39％，八橋32％である。「農業」は鹿野51％，八橋50％，有川21％，宇美10％，後田5％である．「漁業」は有川が21％で他の4地域は0％である．

居住年数は34年以下が宇美75％，後田63％，鹿野31％，八橋25％，有川17％である．また5年以下は宇美が10％で他に比べて高く，宇美のベッドタウン化のあらわれであろうと考えられる．50年以上では漁村型の有川が63％と最も高く，生まれながら有川に住んでいる者が多いと考えられ，農村型の八橋48％，鹿野40％とつづき，都市型の宇美23％，後田12％である．

さらに，地域別の特徴は食品摂取状況，食材料の状況などの結果にみられる．

食品摂取状況の質問項目は国民栄養調査[6]の「食生活状況調査の質問1」によった．項目別の肯定数を地域別に表3に示した．

質問項目別にみると，朝食は5地域とも93％以上が摂取しており，60歳以上における朝食率の全国平均[7]95％に近い値である．以下同様に60歳以上の全国平均と比較すると，緑黄色野菜について鹿野は93％ととくに高いが，その他の地域は全国平均の72％に近い値で

表 3. 食品摂取状況の項目別肯定回答結果

項目	後田	宇美	有川	八橋	鹿野
1	73 (94)・	74 (93)	75 (93)	82 (98)	110 (99)
2	62 (79)	62 (78)	56 (69)	58 (69)	103 (93)
3	65 (83)	49 (61)	42 (52)	59 (70)	90 (81)
4	47 (60)	35 (44)	32 (40)	40 (48)	101 (91)
5	74 (95)	73 (91)	72 (89)	73 (87)	108 (97)
6	49 (63)	35 (44)	29 (36)	52 (62)	53 (48)
7	70 (90)	70 (88)	66 (82)	57 (68)	103 (93)
8	52 (67)	41 (51)	60 (74)	49 (58)	97 (87)
9	71 (91)	71 (89)	60 (74)	55 (65)	107 (96)
10	64 (82)	55 (69)	51 (63)	59 (70)	100 (90)

実数は回答数，・（ ）内の数値は％
項目 1　毎日、朝食をきちんと食べますか
項目 2　毎日、にんじんやほうれん草など緑や黄色の濃い野菜を食べますか
項目 3　毎日、果物を食べますか
項目 4　毎日、生野菜を食べますか
項目 5　毎日、肉か魚または卵を食べますか
項目 6　毎日、牛乳を飲みますか
項目 7　なっとうや豆腐など大豆製品を1週間に3回以上食べますか
項目 8　油を使った料理を1日1回は食べますか
項目 9　こんぶ、わかめ、のりなど海草を1週間に3回以上食べますか
項目 10 いも類を1週間に3回以上食べますか

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

ある．果物は有川だけが52％と全国平均の71％を下回っている．生野菜では鹿野の91％，後田の60％が全国平均49％を上回っている．肉・魚・卵については5地域とも全国平均87％に近い値である．牛乳は八橋が62％，後田が63％であり全国平均40％に比べて摂取状況が高く，有川は36％で全国平均よりやや低い．大豆製品は八橋が68％で全国平均の86％をかなり下回っている．油を使った料理は八橋の58％，宇美の51％が全国平均の61％を下回り，鹿野は87％とかなり上回っている．海草類は八橋が65％と全国平均77％を下回っている．いも類では鹿野が90％，後田が82％と全国平均の71％を上回っている．

つぎに，10項目についてそれぞれ「はい」の回答に2点，「いいえ」の回答に1点を与え，個人別の合計点を算出した．地域別に点数を比較すると有川，宇美，八橋はピークが17～18点で，60歳以上の全国平均[7]と分布が似ている．鹿野，後田については点数が高くなるほど人数の割合が高くなる．とくに鹿野は19～20点が70％と高得点の人数割合が高い．

食材料の自給状況では都市型の後田29％，宇美45％であり，漁村型の有川74％，農村型の八橋86％，鹿野90％となっている．これは地域類型のちがいによる特徴と考えられる．

(2) 食事満足度の特徴

食事満足度については表4に示すとおりである．その内容をみると「食事は待ち遠しいですか」の質問に対する「はい」の回答が42％と少ない．他の5項目については77～91％が「はい」と回答しており，5地域ともに同様の傾向がみられる．このことは前報[1]においても同様の結果が得られている．

つぎに，食事満足度点数の地域別の分布を表5に示した．全体としては11点が39％と最も多く，10点が20％，12点が25％とほぼ同率に近く，9点以下は16％である．これを地域別にみると，鹿野は12点が最も多く，他の4地域と異なった分布をしている．

表 4. 食事満足度の地域別肯定回答結果

食事満足度の内容	後田	宇美	有川	八橋	鹿野	合計
食事はおいしいですか	74 (95)*	72 (90)	74 (91)	75 (89)	102 (92)	397 (91)
食事は楽しいですか	73 (94)	67 (83)	64 (79)	69 (82)	96 (86)	369 (85)
食べたいものを食べていますか	70 (90)	67 (83)	71 (87)	70 (83)	101 (91)	379 (87)
食べたいだけ食べていますか	52 (67)	61 (76)	71 (87)	60 (71)	90 (81)	334 (77)
食事は待ち遠しいですか	26 (33)	28 (35)	33 (41)	31 (37)	64 (58)	182 (42)
食卓の雰囲気は明るいですか	66 (85)	72 (90)	62 (76)	67 (80)	97 (87)	364 (84)

実数は回答数，* ( )内の数値は％

表 5. 食事満足度点数の地域別の分布

満足度点数	後田	宇美	有川	八橋	鹿野	合計
6～9点	9 (12)*	13 (16)	13 (16)	18 (21)	15 (14)	68 (16)
10点	22 (28)	12 (15)	19 (23)	22 (26)	11 (10)	86 (20)
11点	34 (43)	43 (54)	32 (40)	26 (31)	34 (31)	169 (39)
12点	13 (17)	12 (15)	17 (21)	18 (21)	51 (46)	111 (25)
合計	78 (100)	80 (100)	81 (100)	84 (100)	111 (100)	434 (100)

実数は人数，* ( )内の数値は％

(3) 食事満足度に影響を及ぼす要因

1) χ^2 検定結果

食事満足度を6～9点，10点，11点，12点の4グル

表 6. 食事満足度と要因の χ^2 検定結果

項目		χ^2検定	項目	χ^2検定
(食生活にかかわる直接的要因)				
食品摂取状況		※※※	食材料の自給状況	※
欠食状況		※※※	間食状況	NS
食事状況	朝食	※※※	夜食状況	NS
食事状況	昼食	※※	食事内容 朝食	NS
食事状況	夕食	※※※	食事内容 夕食	NS
会話の有無		※※	おかずの品数 朝食	NS
おかずの品数	昼食	※※	食べ物の好き嫌い	NS
おかずの品数	夕食	※※	店屋物の利用状況	NS
食事量		※※※	夕食調理時間	NS
食生活の留意度		※※※	料理への関心	NS
調理の好き嫌い		※		
(食生活にかかわる間接的要因)				
基本属性	地域	※※※	配偶者の有無	NS
	世帯構成	※	孫の数	NS
	子供の数	※	就業状況	NS
	性別	NS	居住年数	NS
健康	主観的健康度	※※※	日用品の買物の可否	NS
	若い人との会話	※	1人での外出	NS
	健康状況 風邪	※	健康情報への興味	NS
	健康状況 便秘	※	相談にのる	NS
	運動状況	※	新聞を読む	NS
	健康留意度	※※※	薬の服用状況	NS
	健康状況 入れ歯	NS	通院状況	NS
経済	経済状況	※	収入満足度	NS
	食費満足度	NS	就業願望の有無	NS
家族	家族関係	※※※		
日常生活	家庭での仕事	NS	余暇のすごしかた	NS
生活意識	生きがいの有無	※※※	不安の有無	NS
地域社会	社会との交流	※※※	悩みの相談相手	NS
生活環境	自分の部屋の有無	NS	生鮮食料品の状況	NS
	食料品の状況	NS	不満の有無	NS

※※※ $p < 0.001$，※※ $p < 0.01$，※ $p < 0.05$，NS 有意差なし

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

ープに分けて，全調査項目とのクロス集計を行い，58項目について χ^2 検定を行った結果は，表6に示すとおりである．25項目に有意差がみられた．

i）食生活にかかわる直接的要因：食品摂取状況や品数など食事の内容に関する項目，食事状況や会話など人に関する項目および食意識をとらえるための食生活の留意点などの12項目が，食事満足度に影響を及ぼすと考えられる．

食事状況の質問は，食事を誰と食べるかについての回答を「1人で食べる」と「誰かと食べる」の二つに分類した．朝・昼・夕の3食すべてに有意差が認められ，「誰かと食べる」は「1人で食べる」より満足度が高い傾向といえる．

会話の有無では，食事のとき会話のあるほうが満足度は高いといえる．

おかずの品数では，昼食，夕食ともに品数が多いほど，食事に対する満足度が高い傾向にある．これは品数が多いと視覚的にも食欲を促し，それが満足度によい影響を与えるのであろう．

食生活の留意点の質問項目は，① 食事で多くの食品をとるようにしていますか，② 肉より魚を食べるようにしていますか，③ 野菜を多く食べるようにしていますか，④ 食事は規則正しくとるようにしていますか，⑤ 食べ過ぎないようにしていますか，⑥ 味付けは薄味にしていますか，⑦ 手作りのものや旬のものを取り入れるようにしていますか，の7項目である．χ^2 検定の結果から，食生活によく留意しているほど，食事に対する満足度が高いと考えられる．

調理の好き嫌いについては，調理好きであるほど食事の満足度が高い．この結果より料理をつくることが好きであれば食卓も豊かになるであろうと考えられ，満足度とのかかわりが示唆される．

ii）食生活にかかわる間接的要因：基本属性，健康，家族関係，社会との交流など生活全般にわたる13項目と食事満足度がかかわっていると考えられる．

基本属性：地域の違いに高い有意性がみられる．食事満足度の地域別分布を表5にも示したように，満足度点数の分布状況に地域の違いが認められる．鹿野は5地域のなかで満足度が最も高い．また，都市型の2地域のうち，後田が宇美より満足度が高い傾向にあり，農村型の2地域では，鹿野が八橋に比べて満足度がかなり高い．世帯構成については高齢者のみの世帯の満足度が二世代・三世代世帯に比べて低い傾向がみられる．前報[1]においても同様の結果が得られており，世代の違う家族の存在が高齢者の食事満足度とかかわっていると考えられる．

健康：主観的健康度では「健康だと思う」人の食事満足度が高い傾向にある．若い人への会話状況では，「若い人に自分から話しかける」が「話しかけない」より食事満足度が高い傾向にある．高齢者から若い人へ話しかけるという積極性と食事満足度との関係は，興味深いと考えられる．健康状況における風邪と便秘では，「風邪をひきやすい」，「便秘をしやすい」が食事満足度の低い傾向にある．運動状況では，「運動をしている」人が食事満足度の高い傾向にある．運動をすることによりおなかもすいて食事がおいしく食べられ，それが満足度につながるとも考えられる．健康維持の留意点は．① 栄養・食事に気をつける，② 睡眠・休養を十分とる，③ 体操・散歩などの運動をする，④ 規則正しい生活をする，および，⑤ その他の5項目について「はい」の回答に2点，「いいえ」の回答に1点を与え，それぞれの人の合計点を算出した．その結果9点が43％と最も多く，8点が35％，7点が15％である．点数の高いほど食事満足度は高い傾向がみられる．健康への関心と食事の満足度とが密接にかかわっているという結果は，高齢者のあり方を示唆するものであろう．

経済：経済状況では「暮らしにゆとりがある」が22％，「ふつう」が70％，「苦しい」が8％である。「ゆとりがある」は「苦しい」より食事満足度が低いといえる．このことは前報[1]においても同様の結果が得られている．

家族：家族関係の質問項目は，① 子供さんとの交流はありますか，② 交流の最もある子供さんの家族から大事にされていますか，③ 交流の最もある子供さんの家族に役立っていますか，④ お孫さんとの交流はありますか，⑤ ふだん寂しいと思うことがありますか，の5項目を設けた．高得点になるにしたがって食事満足度が高く，これは，家族内での人間関係に由来する精神的な安定感が，食事満足度に影響しているのではないかと考えられる．

生活意識：生きがいの有無では，「あり」が満足度の高い傾向にある．面接時の話では，生きがいとしては知識や教養を高めるため老人大学などに参加したり，習い事をしているなどであった．生きがいについての設問は前報[1]を検討した結果，今回新しく加えた項目であるが，高い有意性がみられたことは興味深い．

地域社会：社会との交流状況の質問項目は，① となり近所とのお付き合いをよくするほうですか，② 友達とのお付き合いをよくするほうですか，③ 親戚とのお付き合いをよくするほうですか，④ グループ活動や奉仕活動によく参加するほうですか，⑤ テレビニュースをよく見る

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

ほうですか，⑥社会に役立つような仕事をしていますか，の6項目を設けた．スコアが高いほど食事満足度が高いといえる．

2) 数量化Ⅰ類による分析

つぎに，食事満足度の構造を明らかにするために林の数量化Ⅰ類[2]による分析を行った．

本研究で設定した食事満足度に関する項目の妥当性は前報[1]において述べたこと，および項目間の相関係数が低いことによって裏づけられている．

要因の選定は，χ^2 検定の結果，有意差のあった25要因についてステップワイズ方式で解析を行い，各要因の偏相関係数と範囲に留意し，さらに設定した生活構造の枠組みを考慮して，12要因35カテゴリーを精選した．食事満足度を外的基準として，12要因について数量化Ⅰ類[2]により分析した．結果は表7に示すとおりである．

食事満足度と12要因，35カテゴリーとの重相関係数は0.55であった．食事満足度には食事量，欠食状況，食品摂取状況と基本属性に関する要因として地域，世帯構成など，生きがい，健康に関する要因として主観的健康度，健康の留意度など，さらに家族関係，経済状況など生活全体がかかわっているといえる．なかでも，生きがいが食事満足度と密接にかかわるという結果は，高齢者のあり方を示唆しているとも考えられる．

各要因の規定力の程度は，偏相関係数あるいは要因内のカテゴリー数量の範囲により知ることができる．本分析におけるカテゴリー数量は大きいほど満足度を高めるといえる．そこで各要因別に満足度への寄与の程度を考察する．

表7. 食事満足度に影響する要因

要因	カテゴリー	度数	カテゴリー数量	範囲	偏相関係数
食事量	少ない	52	−0.453	0.755	0.244**
	やや少ない	83	−0.207		
	ふつう	200	0.089		
	やや多い	50	0.161		
	多い	49	0.302		
地域	後田	78	−0.038	0.516	0.191**
	宇美	80	0.055		
	有川	81	0.014		
	八幡	84	−0.307		
	鹿野	111	0.209		
欠食状況	欠食する	44	−0.463	0.515	0.170**
	欠食しない	390	0.052		
生きがい	なし	128	−0.217	0.308	0.155**
	あり	306	0.091		
主観的健康度	不健康	120	−0.201	0.277	0.132**
	健康	314	0.077		
食品摂取状況	14点	38	−0.239	0.341	0.111*
	15〜16点	69	−0.114		
	17〜18点	147	−0.010		
	19〜20点	180	0.102		
夕食の状況	一人で食べる	92	−0.196	0.249	0.111*
	誰かと食べる	342	0.053		
健康の留意度	5〜7点	99	−0.135	0.207	0.085
	8点	145	−0.002		
	9〜10点	190	0.072		
食材料の状況	自給あり	291	0.041	0.124	0.068
	自給なし	143	−0.083		
家族関係	1〜13点	40	−0.026	0.105	0.050
	14〜17点	115	−0.072		
	18〜20点	279	0.033		
世帯構成	高齢者のみの世帯	206	−0.034	0.070	0.036
	二世代世帯	96	0.035		
	三世代世帯	132	0.028		
経済状況	苦しい	38	0.092	0.101	0.033
	苦しくない	396	−0.009		

* $p<0.05$，** $p<0.01$

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

i）食事量：偏相関係数および範囲が最も高く，したがって食事満足度に強い規定力をもつと考えられる．カテゴリーでは「多い」が満足度を高め,「少ない」となるにしたがってカテゴリー数量がマイナスに増加していることは，不満の傾向が認められ興味深いと考えられる．つまり，高齢者の場合よく食べられることが食事の満足度とかかわるのではないかと推測される．また，若い時代からの満腹感を求める食習慣の影響も考えられる．前報[1]においても食事量は第一番目の要因であった結果がさらに裏づけられた．

ii）地域：農村型の鹿野，都市型の宇美，漁村型の有川は満足度にプラスの影響を及ぼしている．なお，農村型の2地域と都市型の2地域について，満足度と表2に示す世帯構成別との関係を比較すると，農村型で満足度にマイナスに影響している八橋は，満足度にプラスに影響している鹿野に比べて，独居世帯の割合が高い．同様に都市型でも，満足度にマイナスに影響している後田は，満足度にプラスに影響している宇美に比べて，独居世帯の割合が高い．本結果は前報[1]の世帯構成別の食事満足度と整合性があり，興味深い．

地域類型と満足度との関係については，今回選定した対象地域の特性などが複雑にからみあい，類型としての特徴を見いだすには至らなかったが，同一類型について対象地域をさらに精選して調査を行うなど，地域と満足度とのかかわりについては今後の検討課題としたい．

iii）欠食状況：「欠食しない」が食事満足度を高め，「欠食する」は満足度にマイナスの影響を与えている．毎回の食事を欠食せずにきちんと食べるということが，食事満足度とかかわるのであろう．

iv）生きがい：「あり」が食事満足度にプラスに影響している．生きがいのある人はない人と比較すると，日常生活において，楽しみがあり精神的な充実感を得る機会が多いと思われる．このような生活の充実感が食事満足度にかかわっているのであろう．

v）主観的健康度：「健康だと思う」が食事満足度を高めている．高齢者にとって健康に対する不安感は，非常に切実なものであろうと推測される．したがって，現在の自分の健康に不安がない人は，不安がある人よりも精神的に余裕があり，実際，健康であれば食事もおいしく，満足感をもつであろうと考えられる．

vi）食品摂取状況：「19～20点」のカテゴリーが食事満足度を高め，点数が低くなるにしたがってカテゴリー数量がマイナスに増加している．つまり，食品摂取状況のよい人は食事に気を配り，栄養のバランスなどにも心がけているであろうと考えると，食事の質的な充実感が食事満足度にかかわっているといえる．

vii）夕食の状況：「誰かと食べる」が食事満足度を高めている．日本では家族の団らん，家族のコミュニケーションの場として，朝・昼・夕の3食のうち夕食を最も重視する傾向がある．そのような意味で，夕食を誰かと食べるということは，孤独を感じることなく，また会話があれば，食卓の雰囲気がなごやかになるであろうことも考えられる．このような食事状況と満足度が関係するのであろう．

viii）残る5要因については，今回のモデルで偏相関係数の有意性はみられなかったが，「健康の留意度」と「世帯構成」は前報[1]において影響の大きかった要因である．

以上の結果を総合すると，食事満足度は食生活状況とともに，生きがいや健康などの生活状況が相互にからみあって影響をうけていると考えられる．総体的にみて，生活全体が充実していることが食事満足度を高めるといえる．これらの結果をふまえて，高齢者にとって満足感が得られる食事にするためには，食事の量や質の充実とともに，生きがいや家族関係のような社会的，精神的な面の配慮が大切だと考えられる．そこで，家族や地域などを含めて高齢者に接する人々が高齢者を理解し，お互いにつながりを深め，高齢者と交流をもつことが大切である．それによって，高齢者は家族や社会の一員としての安定感が得られ，食事の満足感とともに健全な生活づくりが期待されると考えられる．高齢者にとって食べることはいちばんの楽しみといわれるほど，高齢者と食事のかかわり合いは深く，食事に満足することは，生活全体の満足感につながるであろうと考えられる．

食事量，欠食状況，食品摂取状況，健康の留意度，世帯構成，経済状況などは，前報[1]においてもとりあげた要因であり，食事満足度の要因としての妥当性が裏づけられたと考えられる．今後さらに検討を加え，高齢者にとって，よりよい要因のモデルをもとに高齢者の望ましい食事のあり方を研究していきたい．

4. 要　約

対象地域として都市型，漁村型および農村型の地域類型から5地域を選定した．5地域の65歳以上の男女434人を対象に，食事満足度とそれに影響を及ぼす要因について個人面接法で調査を実施した．その結果を数量化Ⅰ類を用いて分析した．

(1) 高齢者の食事満足度は，全体的に高いといえる．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

その内容をみると，満足度を把握するために設定した6項目のうち，「食事がおいしく食べられる」ことや「食べたいものを食べている」などの項目が顕著に高い．

(2) 食事満足度に影響する要因は，第一に食事量の多いことが満足度を高めると考えられる．第二は地域である．選定した5地域の特性や世帯構成率の違いなどが満足度へ影響を与えるのではないかと考えられるが，地域類型別の特徴を見いだすには至らなかった．第三は欠食状況であり，欠食しないことが満足度を高めると考えられる．

(3) 食事満足度には食事量，欠食状況や食品摂取状況などの食生活状況と，生きがいや健康など生活全般が相互にからみあって，影響を及ぼすであろうと考えられるが，今後さらに要因の精選を検討し，高齢者にとっての望ましい食事のあり方を研究していきたい．

おわりに，本調査にご協力いただきました山口女子大学家政学部給食管理研究室昭和63年度専攻生の浅上明子，荒木由美子，河村吉子，前田恵美，丸橋智子の諸氏ならびに対象地域の高齢者の方々と関係者の皆様に深謝いたします．

なお，本研究の一部は平成元年度日本家政学会第41回大会において発表した．

引用文献

1) 足立蓉子: 栄養誌，46，273 (1988)
2) 田中 豊，垂水共之，脇本和昌: パソコン統計解析ハンドブック (多変量解析編)，共立出版，東京，(1986)
3) 総務庁統計局編: 第39回日本統計年鑑，日本統計協会，東京，38 (1989)
4) 厚生統計協会: 厚生の指標 国民福祉の動向，36，10 (1989)
5) 総務庁統計局編: 第39回日本統計年鑑，日本統計協会，東京，44 (1989)
6) 厚生省保健医療局健康増進栄養課編: 昭和62年版国民栄養の現状，第一出版，東京，28 (1987)
7) 厚生省保健医療局健康増進栄養課編: 昭和62年版国民栄養の現状，第一出版，東京，123～124(1987)

NII-Electronic Library Service